京都の誇る合せ砥は水と火のはからい？

「削ろう会」というグループをご存じだろうか。大工の棟梁や弟子、鉋や鑿の鍛冶師など刃物に関わりの深い職人衆が年に数回、その技を競うために集まる。厚さ一〇ミクロン（一〇〇分の一ミリ）の鉋屑さえ削り出す。「削り華」と呼ぶにふさわしい。この技術を支えるうえで仕上げ砥石が不可欠である。これが「合せ砥」である。

京都の合せ砥の歴史は古い。建久元年（一一九〇）、本間藤左衛門が、入洛した源頼朝から日本礪石師棟梁の免許を付与されたことに始まる。その後、足利尊氏の刀剣奉行を務めた本阿弥家も砥石の生産・流通に関わっていたらしい。本阿弥光悦が合せ砥の産地、高雄梅ケ畑にほど近い鷹峰に、徳川家康から土地を拝領したことも、砥石との関わりをうかがわせる。

合せ砥の砥粒である石英のサイズは二〜三ミクロンと微粒である。もしも砂粒が一粒でも含まれておれば、砥石としては失格となる。合せ砥は、きわめて均質な粘板岩を原岩として、それから変化したものである。新鮮な粘板岩は、ふつう灰色をしており、緻密で硬すぎ、砥石には向かない。良質の合せ砥は、黄褐色で水を含みやすい。この性質は、長年月にわたる風化作用によって生み出される。さらに、砥粒が適度な大きさになるためには、粘板岩が、地下深くに貫入したマグマの熱によって、わずかながら灼かれていることが欠かせないようだ。まさに水と火の微妙なはからいが、合せ砥をはぐくんだものといえよう。

微粒で均質な粘板岩は、砂粒をまったく含まず、しかも、層状チャート層の下位に横たわっていることが多い。こうしたことから、もとは、二億五〇〇〇万年もの太古に陸地から遠く離れた大洋底に風などによって運ばれた粒子が静かに降り積もった後、海洋底プレートに乗って、丹波に運ばれたものであろう。不思議な石である。なお、右京区福王子社や梅ケ畑平岡八幡宮には、合せ砥の逸品が奉納されている。

（井本伸廣）

福王子神社　住所／京都市右京区宇多野福王子町52　交通／京福電鉄宇多野駅より徒歩3分。市バス「福王子」下車